

銀友

本郷学園
同窓会誌

平成20年6月1日

第37号



(本郷高校ラグビー部ホームページより)

全国大会に4年ぶり8回目の出場を果たした本郷高校ラグビー部
平成19年12月28日 花園ラグビー競技場 対北条(愛媛県)戦

総会のお知らせ

日時 平成20年6月21日 15:00より
場所 本郷学園会議室
(懇親会は17:00より)

銀友三十七号 目次 平成二十年六月一日

同窓会会長挨拶	山内 英夫	2	本郷祭報告	田中 良一	25
本郷学園理事長挨拶	松平 頼武	3	高松懇親旅行報告	寺田 正美	26
本郷中学・高等学校新校長挨拶	北原 福二	4	定期総会報告	市倉 洋一	27
本郷中学・高等学校前校長挨拶	高橋 雄	5	平成十九年度事業・決算報告		28
校友を訪ねて	藤巻 健三	6	平成二十年事業計画・予算案		29
投稿	景山 正隆	10	同窓会役員一覧		30
投稿	高木 佑三	12	学園便り		31
投稿	長尾 岳人	16	会費納入者一覧		33
投稿	高野 正美	18	訃報・編集後記・本郷祭に同窓会サロン		37
キャリアを活かして母校の教壇に		19			
同期の輪		21			

ご挨拶

同窓会会長 やまのうち
山内 英夫



一九二八年（昭和八年）本郷中学校（旧制）第一回卒業生が学園を巣立ち同窓会を結成して以来八十年、今春の卒業生を迎え入れ同窓会も八十周年を迎えました。

この間母校本郷学園は、戦災による校舎の焼失と生徒数の減少、学制改革により本郷高等学校と本郷中学校としての再発足、中学校の生徒募集の休止、高等学校機械科、デザイン科等の設置とその廃止、中学校生徒募集の再開と、様々な変遷をたどりつつ社会の各層に多彩な人材を送り出してきておりますが、小子化の昨今では、私立学校としてのアイデンティティを打ち出すべく学校をあげて努力されていることに卒業生として大変力強く感じておるところです。昨年には一般入試で入学した生徒のみで構成されたラグビー部が四年ぶりに花園出場を果たし、今春の大学入試は国公立を含めた有名大学への合格者が大幅に増加したとのこと、学園の目指す文武両道

が具現化されつつある証でもありませんよう。

翻って同窓会の状況を見るに、戦中、戦後の混乱期に事実上停止していた同窓会活動は昭和三十一年に再開されたものの、中断の影響もあって卒業生の住所の把握が不十分のまま推移し、ために組織率は低調のまま今日に至っております。同窓会活動を活性化させ母校の発展に寄与するためには組織率を高め、同期の輪を広げていくことが何よりも今求められていることとあります。ここ数年同窓会としての活動の重点を同期会、クラス会の開催のサポートに置いていたのも、これによって住所不明者を減少させ組織率を高めていきたいとの思いからであります。八十周年を迎えた今、役員一同思いも新たに同窓会の活性化に知恵を絞っていく所存であります。各員各位のさらなる協力をお願いし、ご挨拶いたします。

ご挨拶

本郷学園理事長 **松平頼武**



日頃、同窓会の皆様には、母校に対して目をかけ、応援を頂いていることに心から御礼申し上げます。

さて、昨年暮れの四年ぶりの高校ラグビー全国大会出場の際には、多くの同窓会の方々、そして関西在住の多数のOBの方々にも応援を頂き有り難うございました。特記すべきは、平成十五年度よりスポーツ推薦クラスの募集が無く、総ての選手が中学又は高校の入試で入った生徒たちであり、これが全国大会出場の快挙を成し遂げたことは、高く評価すべきことと考えています。これが本来の高校生スポーツのあり方であると思っております。また、出場が決まってからは、学校全体が一つ心になって出場を喜び、選手に大きな声援を送り、励ますという素晴らしい盛り上がりを見せられました。

また、秋の体育祭、文化祭が、総て生徒の企画、運営で行なわれるようになって数年が経ちますが、

整然とした、落ち着きのある、本郷らしい品格のある催しが出来るようになり、たいへん嬉しく思っています。

二月に行なわれた中学、高校の入試は、前年と変わらない多くの志願者を集めて終わることが出来、他からも高い評価を受けています。また、大学受験の結果も、昨年を上回るもので、喜ばしいことです。

これは、高橋雄校長を中心とした教諭陣の努力の結果であります。平成二十年度からは、高橋校長が退任され、北原福二中学教頭が校長を後継いたしました。

今後とも、同窓会の皆様の変わらないご指導、ご支援をよろしくお願い申し上げます。

校長挨拶

本郷中学・高等学校 新校長 北原 福二



同窓会の皆様には母校の為にご支援ご指導を頂き誠に有り難うございます。

この度、高橋先生の後任になりました北原福二と申します。宜しくお願い致します。

本郷に中学教頭として二年、学校の動きがやっと掴めてきたように思います。

この二年の間に本郷の逞しさを様々な角度から見てきました。

朝読書に始まる一日の生活のリズム、更には年間行事においては年度当初のオリエンテーション、林間学校、体育祭、本郷祭、修学旅行、マラソン大会、スピーチコンテスト；どれも一つとっても活動の意義があり、それが学年相応の取組の中にあります。この動きの激しい、意欲溢れる生徒や学校のバイタリティが楽しみです。

学校の校訓である「強健・厳正・勤勉」の実践として、高橋先生の纏めてきた「社会に有為な人材」

となるために、人間力、社会力を身に付けた人材を送り出したいと思えます。

その実践として

一、文武両道：自主性を持ち、責任を重んじること

二、自学自習：目標を立て、教えられるのではなく、一生懸命努力して自ら学ぶこと

三、基本的生活習慣の確立：挨拶、感謝、思いやり、など「人としてどう生きるか」考えること

青少年の生き方に関する話題が絶えない不透明な時代であるからこそ、本郷学園から礼儀正しく人の意見に耳を傾け、自分で考え自分の言葉で意見を言える青年に成長して欲しいと思っています。

感謝

本郷中学・高等学校 前校長 高橋 雄



本郷学園にお世話になったのは平成十二年でした。この年は、アドバイザーとして週三日間の出勤でしたが、この年から本郷の改革が始まりました。

すでに他校では、小子化による生徒数減を考えて学校改革に着手し、共学校にしたり、選抜学級、特進学級を設けたりと学校改革をしていました。

この時の本郷は、スポーツ推薦クラスがあり、理科クラスがあったりで、一応改革に着手はしていましたが、いずれも成功には至りませんでした。

時代は、大学合格実績が学校選別の基準になっていたので、本郷が生徒数を減らさない為にも、大学合格実績をあげなければなりませんでした。

まず、十三年度からスポーツ推薦、理数科募集を止め、土曜日を休日にして週五日制の授業展開、特進予備クラスを中三に作る事になっていました。

十四年度から校長に迎えられ、まず週五日制を六日制にし、色々改革をしましたが、校訓の「強健・

厳正・勤勉」を根幹に、学校の教育方針を「文武両道・自学自習・基本的生活習慣の確立」として教育する事にしました。結果は、徐々にではありますが生徒に浸透してきました。

私の約半世紀にわたる教員生活の最後を本郷学園で送れた事に感謝します。素直で、男らしい生徒達との出会い、そして同窓会の人達の学校に対する熱い思いに触れ、学校はますます発展していくと感じました。

また、同窓会が今年から卒業生に学校帰属意識を持たせるきっかけとなるであろう「成人を祝う会」を実施される事は、素晴らしい事と思います。

校長として六年間同窓会のお役に立ちませんでした。が、暖かく接して頂いた事に感謝致します。有り難うございました。本郷同窓会の益々の発展をお祈りしています。

校友を訪ねて

藤巻 健三氏（高校8回＝昭和31年卒業）に聞く

野球人生一直線―そのスタートは本郷時代―



昭和三十〇

四十年代は野球の最盛期。

プロ野球、

社会人野球、

大学野球、高

校野球とTV

はもちろんス

にかかわっておられますか。

藤巻―母校駒澤大学野球部OB会の名誉会長

として相変わらず野球とは縁の切れない生

活です。その傍ら、孫の少年野球のアドバイザー

の立場で毎日を過ごしております。昨年

まで駒大野球部OB会会長のほか東都大学野

球連盟理事、全日本大学野球連盟評議員も

務めていました。

になり、人数が足りないので入らないかと誘

われ、それを機に野球を始めました。以来、

面白さを知り完全に野球小僧になってしま

ました。当時、私の通っていた中学には野球

部がなく、数人の友達と夕方まで運動場で泥

まみれになりボールを追いかけていたことを

思い出します。

本誌―本郷高校で本格的に野球をやるようになるのですね。

藤巻―都立高校に合格していました。でも、

硬式野球がたくて私立高校の学校案内書

を見て、目に止まったのが本郷高校でした。こ

の学校に入りたい、そして野球部に入りた

い、と心に決めたことが、昨日のように記憶

に残っています。ここまで野球にかかわる人

ポーツ新聞、一般紙までスポーツ面は野球一色でした。そんな時期に本校を卒業し昭和四十四年の都市対抗野球大会で全国制覇したOBの藤巻健三氏をインタビューいたしました。氏の人生のすべての出発点の本郷のグラウンドで培われたことを実感致しました。

◇

本誌―古希を迎えられた今、野球とどのよう

◇

なった時、友人のお父さんがチームを作る事

り、壁打ちなどで遊んでいました。中学生に

なつた時、友人のお父さんがチームを作る事

生を送れたのは、本郷高校野球部で硬式ボールを握ったあの時からです。今でもあの時の選択が、正しかったことを心から感謝しています。

本誌ー野球を中心に、充実した高校生活ですね。

藤巻ー本郷の校風というか、野球部のチームワーク、人間関係がとても素晴らしい学園でした。当時主将の、根立光夫さん(高6回生)が部をよくまとめていました。佐甲義一さん(高7回生)などの先輩方も、後輩の私達を弟の様に接してくれました。日が暮れても練習に励み、帰り道でコップパンをかじりながら語り合った同期の新藤真市、勅使河原宏記、波多野英夫、三村孝一、渡辺茂明君らとは、今でも永遠の親友として付き合っています。

本誌ーそういう想いが将来の野球人生に生かされたわけですね。

藤巻ーそうですね。大学野球、社会人野球で

各ライバルと競ってこられた本当の恩人で、決して忘れてはならない方がおります。

故吉田利夫先輩(高1回生)と島崎雄司先輩(高5回生)です。特に島崎さんは大学在学中にもかかわらず、未熟な私たち後輩のため、毎日グラウンドに來られ指導してくれました。とても恐い先輩でしたが、野球に取り組む姿勢、研究心、根性、すべてを教えて頂きました。駒澤大学で各ライバルに負けずにレギュラーになれたのも、島崎先輩のおかげです。野球人としての基礎を叩き込んで下さった恩人です。

本誌ー高校三年の夏は二回戦敗退、その後の進路をどのように考えておられましたか。

藤巻ー高校卒業時、身長が一六四センチ、体重六十キロ前後だったでしょう。それでも大学で野球をしたいという希望は持っていました。経済的な理由で進学を断念して就職の道を選択いたしました。ところが、その職場で私の人生のターニングポイントとなるド

ラマが生まれるのです。それも昼休みのキャッチボールがきっかけ。

本誌ーと、いいますと。

藤巻ー勤め始めのころ、同じ会社で働いて、後に俳優になられ活躍されている天田俊明さんと昼休みにキャッチボールをしたところ、天田さんが「お前うまいな、今、駒澤大学で部員を募集しているが受けてみないか」と駒澤大学野球部を紹介してくれました。どうせお金もないから大学には行けない、と思いつつも会社を休んで、二日間のテストを受けたところ、パスしたのは十人中私だけでした。そして、学費を心配しませんでした。キャッチボールと天田俊明さんとの縁が私の人生を決定付けたのです。

本誌ー駒大野球部で、全国から集う素質のある選手と競ってレギュラーの座を勝ち取るのどのような努力をされましたか。

藤巻―その頃の駒大は東都の一部とはいえ、いつも五、六位に位置していました。部員は六十名ほどでしたが、ポジションが固定されている選手は五、六人で、あとは日替わり出場する状況でした。ほかの新入生より遅れて入部した私でしたが、先輩たちがいるなかでその日替わりの一人として先発出場していました。二年生まではショート、三年生の春からはセカンドのレギュラーで、四年生の時はキャプテンでした。名門高校出身の選手も結構いましたので、必死に練習もしました。それとともに本郷での猛練習のおかげで基本プレーには自信がありましたので、自分の体に相応したプレー、得意なプレー、俊敏さをつねにアピールしていました。その意気込みが認められたのかもしれませんがね。

本誌―電電関東(現NTT東日本)に就職され社会人野球で活躍されますが。

藤巻―当時、電電公社には、すでに全国で十球団が活躍していました。東京を除く関東地

区を統括する電電関東が公社として十一番目の野球部を結成することになり、内野手として請われて入社しました。昭和三十五年のことです。新人のみの弱小球団です。当初、会社では成績に期待をしていなかったと思えます。社員の協力と上司の方々の理解でのびと野球ができました。そのかわり、野球で強くなり勝って恩返しをしようと心に誓ったものです。

本誌―電電関東が初めて都市対抗野球大会に出場するのは何年のことですか。

藤巻―初出場は昭和三十七年ですね。その時私はキャプテンでした。それから三十九年、コーチの時に出ています。そして四十三年に監督になり、四十四年に地区予選敗退後敗者復活戦から勝ち上がって、三回目の出場を果たし、優勝して念願の日本一になりました。以来、監督として三年連続三回出場しています。

本誌―発展途上のチームの監督になられてどの様な指導方法、方針をもって取り組まれましたか。

藤巻―監督としてのグラウンドでの仕事は、選手一人ひとりの個性、特徴を適確に活かす補強(新人)を含め、チーム力をいかに全国レベルに上げていくかです。教え方には法則がありません。一つは「指導のポイントをおさえて一時に一事の原則」、そして「個別指導の原則」です。それと負けが続くチームの機能が不調になった時など、精神面の向上を図ると共にハードな持久走を毎日続けることにより、頑張る精神と諦めない根性を鍛えたものです。これは人生すべてに通じる事と思います。優勝は、俗に言う無欲の勝利でした。四十四年の都市対抗優勝は、大会史上初の九回裏逆転サヨナラ優勝で、非常に幸運でした。

本誌―史上初の九回裏逆転サヨナラ優勝を勝ち取られますが、他にも本郷野球部OBで初優勝の記録を持った卒業生がおられるそうで



都市対抗史上初の9回裏逆転サヨナラ勝ちで優勝を飾り胴上げされる藤巻氏（昭和44年）

すね。
藤巻ーそうです。根立光夫さんは学習院大学が東都大学リーグで初優勝した時の優勝投手です。小島友宏君（高10回生）は駒大初優勝の時の正捕手として活躍しています。一般人

試で入部し小柄でしたが努力して正捕手の座を勝ち取り、卒業後社会人野球の河合楽器で何回も都市対抗に出場しています。平石幸夫君（高20回生）も首都大学リーグで明治学院大学の初優勝エースです。彼は私が監督のとき電電関東に来て活躍してくれました。

本誌ー最後に、野球の醍醐味と選手として最も大事なことをお聞かせください。

藤巻ー社会人野球でいえば、都市対抗に出場して優勝するという大きい目標がありますから、その前に一つひとつ乗り越えていかなければならない道があります。県予選があつて地区予選、それから本大会の都市対抗になります。それ故に、自分達の力を見定めながらも、さらに上を目標にして課題をクリアしていく時の喜びは、何ものにも変えがたいものです。野球に限らず、どんなスポーツも同じだと思いますが、練習を二の次にして試合だけ、では意味がない、目標をもって、真剣に心と心を通い合わせて練習に取り組み、その

結果を試合で試す。それが「タメシアウ」すなわち試合です。勉強も同じで毎日の授業で学んだことを試験する。つまり「タメシテタシカメル」のですね。苦しくても、辛くとも絶対に負けない、止めない、との精神で挑戦していけば、あとは結果が答えを出してくれます。勝ちがあつて負けがあるから、負けた時にどのように自分達の姿勢を修正するか、勝った時、また、何を考えるかです。すべてが人生そのものではないでしょうか。

本誌ー本日は、お忙しいところご足労頂き、また、貴重なお話をお聞かせいただき有難うございました。

◇

平成二十年二月二日

◇

三菱養和会巣鴨スポーツセンター「レストラ
ンパルテール」にて

取材 市倉 洋一、関塚 正治、平野 隆之
写真 寺田 正美

本郷中学校時代の思い出から ― 永井道明先生 ―



私が生まれたのは母校の旧制本郷中学校創立と同じ年(大正十一年)である。母校と同年ということ、本郷

宝塚、和歌山、奈良、伊勢を巡る大旅行をしたのであるが、京都、神戸、大阪などの大都市の駅前に「国民精神総動員」というスローガンが筆太に書かれた大きな標柱が立てられており、世の中が何か緊迫した雰囲気包まれていたことが一際よく印象に残っている。

私が本中に在学した五年間は、まさに「国民精神総動員」というスローガンが物語るように、大東亜戦争に向ってゆく厳しい時代であった。三年生となった初夏に支那事変が起り、本中を卒業して進学した旧制の府立高等学校文科乙類に在学していた、昭和十六年十二月八日に大東亜戦争が勃発した。

当時の本郷中学校は、校長は創立者の松平頼寿伯爵であったが、わが国の「体操の父」ともいわれ、体育の分野でその人ありと知ら

れた永井道明先生が教頭として校長を代行されて普段の校務運営に当たっておられ、体育の盛んな中学校として知られており、他の中学校よりも体操(当時は「体育」とは言わなかった)の時間が多く、週に一時間は学年全体の合同体操を、永井教頭ご自身が担当しておられた。明治元年生まれの永井先生は、当時七十歳前後のご高齢で、渾名の「太陽」の通り見事な禿頭で、老人らしい温顔の内面に教育者らしい厳しさが感じられ、十四、五歳の少年には何か近寄り難いものがあった。

私は、小学校入学前から小児喘息の持病があり、どちらかといえは虚弱な体質だったもので、本中の体操はかなりきつく、入学して間もない頃は、鉄棒などは尻上りはおろか、飛びつくことも容易でなく、しばしば泣きそ

中学校に対する思いには格別なものがある。

八十五歳の高齢者となり無性に懐かしく思い出される本中(当時はこのように略称で呼んでいた)に在学したのは、昭和十年四月から十五年三月までの五年間であった。一年生の夏休みに、私の一家は、両親の墓参を主目的として、約一ヶ月に亘り、両親の郷里である高根県を中心に京都、秋芳洞、厳島、神戸、

をかく程であった。しかし、鍛錬は恐ろしいもので、一、二ヶ月の間には鉄棒も授業で教えられることは難なくこなせるようになり、体操の時間が面白くなったばかりでなく、弱い体が鍛えられたのである。八十五歳の今日健康でいられるのは、本中時代に鍛えられた賜物ではないかと思っている。

本中の二年生の秋、私は例年の通り、九月下旬に喘息の発作が起こり、二週間程学校を休んだが、回復して登校した当日、休み時間に校庭に出て歩いていると、後ろから「オイ景山」と呼ぶ声があった。大人の声なのでハツとして振り向くと、それは教頭の永井先生であった。教頭に名指しで声をかけられた私は吃驚して直立不動の姿勢で向き直った。すると先生は「オイ景山、喘息はもういいのか」とやさしく言われたが、緊張していたのであろうか、私はその時どのようにお答えしたかは覚えていない。多分「ハイ大丈夫です」ぐらいのことをお答えしたのだと思う。千名ほどの全校生徒を預かる教頭が、一生徒の名前



永井道明先生胸像
(本館正面玄関脇)

を知っておられたのである。名前ばかりか、私が喘息持ちであることも知っておられたのである。この一事によっても、永井先生が並みの教育者ではなかったことが知られる。先生は、私たち十三回生が四年生を修了した昭和十四年三月に退任された。

後日談であるが、昭和十七年の秋、私が府立高校の二年生の時、水道橋駅近くの交差点で、私は後樂園のほうから歩いて駅に向かって行き信号の「生まれ」で立ち止まっていると、向こう側で信号の変るのを待っている人々の中に、思いもかけず懐かしい永井先生のお顔

が（禿頭が）見えたのである。信号が変り、私は向こうへ渡らず、直ぐ前の安全地帯で先生が渡って来られるのを待ちました。先生は「ヤア、景山君、元気にしているかね」と優しく声を掛けて下さった。ホンの三、四分であるが、立ち話となり「先生もどうか長生きをして下さい」と申し上げてお別れした。その後先生にお目にかかる機会はないままとなってしまったが、後年、私も、高校から大学へと教壇に立つ身となり、折りに触れては先生を偲び、万分の一でもあやかりたいと思いつつ、永井先生の教育者らしい風貌と言動を思い浮かべている。

プロフィール

文学博士

財団法人日本舞踏振興財団評議員。

社団法人全日本郷土芸能協会顧問。

国立劇場養成課講師。

東京大学文学部国文学科（旧制）卒。

私が見た中国半世紀

高木 佑三（高校12回Ⅱ昭和35年卒業）



私の本郷高校を卒業してから、すでに四十八年過ぎた。学校では平凡な生徒で新聞部に属していたので学

校の行事（校内、校外）の取材活動のために授業の欠席（サボリ？）が大目に認められていた。当時本郷高校は相撲部とプラスバンドが活躍しており私はこの両部の記事を主に執筆していた。

私は高校在学中大学への進路は考えておらず高校三年の九月に某製紙会社の入社が内定した。しかし就職内定通知書を受けた瞬間大学進学への気持ちが強く湧き上がってきた。

しかし、当時大学受験勉強は何もしておらず、僅か四ヶ月の受験準備で合格できるような大学はどこもなく一年間浪人生活も覚悟した。そのことで担当教師であった森先生に相談したところ、「亜細亜大学」に推薦入学制度がある。またこの大学は香港の「新亜書院（現在の香港中文大学）」との交換留学制度という特色がある。これからは中国が世界で最重要視されることは必至であり、中国を知るためにもこの大学に入り香港留学を狙うたらどうか」と薦められた。

率直に言えば、当初私はこの大学に進学することにあまり乗り気でなく、浪人してでも他の大学に行こうかと迷った。最終的には香港留学を目指そうと決意し推薦入学で同大学に進学した。（本郷高校からは私以外六、七人が同大学に入学した。）そして中国語を第二外

国語として選択し中国語を学習し始めた。この中国語が私の半世紀にわたる仕事の糧となった。

一九六三年（大学四年）、幸いに同大学に入学した目的である香港留学試験に合格し、二年間香港中文大学に留学し多方面にわたって経験を積むことができた。交換留学生であったので香港での学費、宿舍、食事は無料で、日常生活に必要な雑費などを二、三のアルバイトで賄うことができた。このアルバイト代が意外に高く日本に帰国してから勤務した会社の初任給より高かった。

一九六五年香港から帰国後中国貿易商社である東工コーセン(株)に入社した。以来同会社で四十三年間一筋に中国貿易に従事してきたのであるが、この四十三年間で中国は大きく

変化した。この四十三年間中国での十数年に亘る駐在生活（北京・上海・南京・広州）、また百数十回の出張を通じ激動する生の中国を数多くの出来事をこの目で見、学びまた貴重な体験をした。この間に起きた中国の歴史を振り返り簡単に記してみた。

私が初めて中国に出張したのは一九六七年十一月で中国経済が停滞、後退したと言われた所謂「文化大革命」が始って間もない時期であった。私の行動、発言が二十四時間中常時中国にチェックされているような感じがし緊張した生活であった。当時国交が回復していなかったのも日本には中国領事館が設置されておらず、日本で中国への入国ビザが取得できず香港で中国旅行社に申請していた関係、どうしても香港に一泊せざるを得なかった（もつともそれが我々の楽しみであったが……）。

当時中国に行くには羽田→香港→広州→北

京→上海のルートしかなく香港、広州で各一泊したので三日間要したが、現在は成田→北京→上海まで直行便が飛び三→四時間で飛行できるようになり非常に便利になった。中国から出国する時写真ファイルの未現像は持ち出し厳禁で、現像したネガも詳細にチェックされた（鉄道、港、軍関係施設の写真は没収された）。また荷物も全部開けられ、厳重にチェックされたので、税関員の心証を少しでも良くしようと、トランクの一番上に毛沢東の大きな写真を入れたこともあった。

当時は毛沢東思想宣伝隊という若者達（中には紅衛兵もいた）が列車内、飛行機内にも乗っており、彼らと一緒に「毛沢東語録」を読まされたり、革命歌を唄わされたりした。商談時にもまず十分ぐらい商談相手と一緒に毛沢東語録を読み（相手は中国語、日本人は日本語、欧米人は英語）、それが終わってはじめて商談に入れた。強制的に他国の指導者の思想録を読まされたり、革命歌を唄わされた

りすることに大きな抵抗を感じたが、国交がない中国と取引するためには中国のやり方に従わざるを得なかった。

中国と貿易を行うためには会社自体が中国から「友好商社」といった指定を受けなければならず、また台湾と貿易を行っている大手商社は中国と取引ができなかったので、「ダミー」会社（共産圏と専門に貿易を行う子会社）を作り、そこを通じて貿易を行っていた。

日本企業の事務所及び社員の居住はホテルであったのでホテル内に「学習会」というものが組織され、そこで毛沢東思想の学習、人民公社の参観、革命劇の観劇、中国の現状の情報交換を行っていた。この学習会への出席率、発言内容、態度が中国側の関係機関に掌握され個々の友好度が採点されていたとの噂である。また当時日本政府は大陸の中国を「中共」と呼んで、正式な中国とは認めず敵視政策をとっていた（台湾を正式な中国と認めて

いた)。このため大陸中国への渡航者は少なく正確な中国情報入手が困難であった。日本の某機関は情報を収集するため中国からの帰国者を訪ね情報を聴取していた。

当時中国はアメリカを最大の敵国とみなし、「アメリカ帝国主義」と「帝国主義」を付け加えて呼んでいた。それから四十年過ぎた今日、米、中間貿易は中国にとって第二位を占めるまで発展し、両国にとって重要な関係国となったのであるが、今日のような姿になるとは当時誰しも想像がつかなかった。

一九六九年にはそれまで一枚岩と言われていた中国、ソ連がウスリー河珍宝島国境で激烈な衝突を起こし、それ以後中ソ関係は悪化し、中国はソ連を「ソ連修正主義」と呼ぶようになった。北京天安門広場で連日反ソデモが行われているのを直接見て、その規模、エネルギーの大きさに恐怖を感じたものである。

一九七一年に中国が国連に加盟してやっとう国際世界の一員として認められたのであるが、当時中国知識者でも日本の実情をよく知らず誤認識している人が多くいて井の中の蛙であった。私はこの誤認識を改めるようにと努め彼らとよく口論した。一九七二年田中首相が訪中し日中国交が回復し、その後日中友好条約が締結され日中関係は改善された。この日中国交回復によりそれまで中国を侵略した日本人として中国で肩身の狭い思いをしていたのが少しは楽になった。

一九七六年当時中国で卓越した二大リーダーであった毛沢東（思想）と周恩来（行政）が死去し、また文化大革命を推し進めてきた所謂四人組が逮捕されて暗いムードに包まれていた中国に解放感が漂いはじめた。一九八〇年これら四人組の裁判がテレビで実況放送された。四人組のリーダーであり、一番評判の悪かった毛沢東夫人の江青に死刑が

言い渡された。判決文を聞いて表情を一瞬ギョッさせ、すぐに狂ったように腕を振りかざして大声で裁判官に抗議する江青の姿がテレビ画面に大写しに出された。この映像は今日になってもまだ生々しく脳裏に残っている。

一九八九年六月四日、世界を驚かせた北京天安門事件（民主化を求める学生運動に対し政府は軍隊を出動させ流血の惨事を招いた）が発生した。北京に駐在している外国人は身の危険を感じほとんどが帰国した。当時私は上海所長として駐在しており、本社から帰国命令が出されたがそれほど危険を感じなかったので帰国しなかった。この事件の詳しい状況をテレビや新聞などメディアは報道管制されていて、報道しなかったので我々を含め中国の一般大衆は北京で何が起きているのか詳しく知らなかった。逆に日本で新聞、テレビを見た人達が心配して問い合わせしてくる状況であった。また我々はNHKの海外放送や香港からFAXされてきた新聞で状況を

知ったが、そのFAXもすぐに管制されて流されなくなった。

当時の上海市長が前中国共産党総書記の江沢民であった。この六、四事件の一ヵ月半前の四月十七日にわが会社の社長が江沢民と会見した。私もその会見に同席し江沢民と名刺を交わし握手をした。その時はまだ前記六、四事件の兆候もなかったので江沢民との会谈内容は貿易に関する問題であった。江沢民の後任の上海市長が朱熔基(前中国首相)であったが、朱熔基市長とは数回会う機会があり一対一で話したことも忘れられない思い出となっている。江沢民及び朱熔基市長の名刺は今も私の名刺ファイルに大切に保管している。

一九九〇年代に入り中国は従来の「計画経済体制」から「社会主義市場経済体制」に大々的に政策を転換し、大規模な経済発展を図り始めた。その後今日まで毎年連続10%以上の発展を遂げ、世界経済のトップグループの地

位を占めるようになった。今日中国の経済が停滞すれば世界経済は無傷ですまず、日本から中国に進出している二万企業にも大きな影響を及ぼすような状況になっている。

しかし、その発展する社会の中で人民の貧富格差の拡大、民族的統制(チベット、台湾、モンゴル、少数民族)、礼節、法律遵守、自己中心に考える中華思想問題等々(詳細は省く)数多く解決しなければならぬ問題が山積している。最近中国では野菜残農、ペットフード、玩具有害、餃子中毒、チベット暴動など国内外で大きな問題が発生している。これら問題をうまく解決しなければ今後の中国の更なる発展は順調に進まないであろうと危惧している。また今年の北京オリンピック、二〇一〇年の上海世界博覧会が終わった後にパブル経済が崩壊するだろうと見られておりその対応、対策が注目されている。

上記のように私の約半世紀は中国と切り離

せない人生を過ごしてきて、ある程度中国という国民性、民族性というものを理解したはずであるが、まだ中国人民の伝統的「中華思想」を基本として発生する彼らの行動や考え方を受け入れられない点が多々ある。しかし、この中国との半生も、本郷高校「亜細亜大学」香港中文大学「東工コーセン」といった繋がりによるものであり、そのスタートが本郷高校であったことに何かの因縁を感じている。すでに六十六歳となり年金をもらう身分となり、そろそろ中国と別れを告げたいと思っているが今も依然として月一回出張している。

母校本郷高校には四十年も訪れていない。どのように変わったのか知りたいので近日常に訪問し、懐かしく昔の思い出に耽りたいと思っている。

ラグビーこそ僕の青春譜

長尾 岳人（高校57回＝平成17年卒業）



本郷高校が、第87回全国高校ラグビーフットボール大会、いわゆる「花園」に、東京都の代表として出場することを知り本郷高校が、

前大会では決勝戦で関東学院大学に負け、あれほど後悔したこと、悔しい思いをしたことは初めての経験でした。それだけに、この優勝までの1年間は必死の1年間でした。

当にうれしく思いました。テレビで試合を観ていました。結果は、僕が4年前に花園に行った時と同じで、2回戦で負けてしまいました。が、本郷高校の名前を全国に知らしめることになり、健闘した選手をはじめ関係者の皆さんに感謝せずにはいられません。そして、ちょっぴりうれしかったことは、本郷出身は僕だけの早稲田大学ラグビー蹴球部のメンバーに、本郷ラグビーの存在を知ってもらえたことです。本来なら応援に駆けつけたい

その大学選手権大会では、早稲田が慶応大学との決勝戦に勝利し、念願の優勝をもち取ることができました。この大会では僕もレギュラーになり、途中ケガで引っ込んだこともありましたが、決勝の慶応戦ではフル出場しました。そして、バックスの核として体を張ってタックルし、走りまくりました。勝負を決めるトライも取れて責任を果たせ、心の底から「荒ぶる」を歌いました。この時の感動、感激は今も忘れることはできません。また、ただただ勝つことを目指してきました

が、さらに勝つことのすばらしさをも実感できた大会となり、僕にとってはかけがえのない大きな心の財産になったと思っています。

「Penalty」（突き抜ける、貫く）をスローガンに新チームがスタートし、絶対に勝てるワセダをよみがえらせようと誓いあいました。それは常にラグビーの原点を確認しつつ、あれこれ迷わず特訓に耐えぬいた自分を信じ、早稲田らしいプレーを展開することでした。3年生の僕も、最上級生のつもりで、今年負けたらもうダメだとの思いで、自分ながらに負けた時の悔しさをずっと胸に秘めながら、頂点に立つことだけを思い描いて、厳しい練習に耐えに耐えてきました。

思えば、僕のこれまでの進路は、ラグビーを続けることで決まってきました。母と早稲田でラグビーをしていた義理の叔父のすすめ



(早稲田大学ラグビー蹴球部公式サイトより)

日本選手権、タマリバ戦(2008年2月23日)で激しいタックルを連発する長尾君

で地元クラブに入ったのがラグビーを始め
たきっかけです。その後、本郷高校に進み3
年間みっちりきたえてもらいました。そして、
スポーツの自己推薦のかたちで、たくさんの
名選手が育ったあこがれの早稲田に入学しま
した。

早稲田でレギュラーになるには大変な努力
が必要です。高校の日本代表をはじめラグ
ビー名門校の卒業生たちとの激しい競争に勝
ち残っていかなければなりません。体力、技
術力が基本ですが、あわせて局面、局面での
状況判断力など、メンタルな部分も含めた総
合力が問われます。その意味では、本郷時代
に大浦監督、渡辺コーチにラグビーの基本を
教えていただいたことが大きな力になってい
ると思います。

早稲田ラグビーの「らしさ」とは、どんな
チームにも勝つことです。今年は追われる立
場にあります。それだけに、優勝の実績にお
ごることなく、大学選手権の連覇を目標に、
常にチャレンジャーでいこうと、再三のミー

ティングでも確認しあっています。監督が示
したスローガンは「Dynamic Challenge」(大
胆な挑戦)です。昨シーズンと同じことをやっ
ていたのでは敗北は目に見えています。チー
ム力をさらにレベルアップしていくために、
僕たち選手一人ひとりに課せられる課題を明
確にして、新しいことに挑戦していかなけれ
ば、連覇は夢物語に終わってしまう、と覚悟
を決めています。

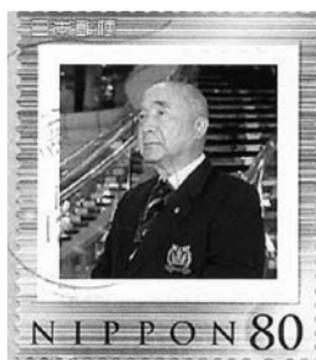
僕にとって、ラグビーの魅力は生身の体を
ぶつけていくところです。たとえば、試合に
出られない選手たちの分まで、自分以外の人
のために体を張って、勝利の道をこじ開けて
いくところに、緊張感と爽快感を覚えます。
今年は4年間の大学生生活総決算の年です。自
分自身を完全燃焼させ、それこそ悔いを残さ
ない、後悔しない1年間にしたいと思ってい
ます。そして再び「荒ぶる」を絶唱したいと
決意しています。

(早稲田大学教育学部社会学科4年

ラグビー蹴球部副将)

本中一年生の『電車通学』

高野 正美（中学17回＝昭和19年卒業）



私は旧制

十七回卒です
から、昭和十
四年に入学し

た訳で、私は
晴れて憧れの
中学生、電車
通学が出来る

ようになりました。小学校とは打って変わって、黒の詰襟服、五つの金ボタンがついて、右肩から斜めにかばんをぶら下げて何故かお兄さんになった気分でした。

湯島の自宅から学校までは遠いので歩いては行かれませぬ。所謂『電車通学』なのです。

今は東京で路面電車というと、三ノ輪から王子を通って早稲田まで行く一本しかありませんが、その当時、東京都内は何十系列かの路線が縦横に通っていました。

私の通学路線は、当時十九番線と言って、日本橋から本郷の東大前を通って飛鳥山まで行く線で、私はその中で『湯島二丁目』から『駒込車庫』まで乗りました。

『本郷も』かねやすまでは江戸の内』と言われた『本郷三丁目』には名物の「ひげの立派な交通巡査」が十字路の真ん中に立ってピーっと笛を鳴らし身振り手振りも良く、交通整理をしていました。又、沿線は学校が多いので、乗客は東大生や途中の中学生や女生が降り降りし賑やかでした。停まった十幾つかの停留所名は今でも空でいえます。

日中戦争が盛んになると、何故か神社の前を通る時、車掌が『拝礼』と言うので、何となく頭を下げたものでした。

その都電はカーブを曲がる時は車掌が後部に乗り出して『ポール』をキイキイさせながら、且つそれが外れないように操作していま

した。あの当時の都電の音が無性に懐かしく思い出しました。私の記憶違いが無ければ、都電十九番線の停留所は日本橋が折り返し点で次は三越前→室町三丁目→神田駅前→須田町→万世橋→神田明神前→湯島二丁目（私の乗る所）→本郷一丁目→本郷三丁目→赤門前→正門前→一高前（農学部前）→追分町→蓬萊町→肴町→吉祥寺前→富士神社前→上富士一丁目→駒込橋→駒込車庫前（下車）→霜降橋→蚕糸試験所前→印刷局→飛鳥山。ここまでで、その後は当時『王子電車』と言われていた王子駅に繋がりました。

沿線の中学校は郁文館中学、京華中学、駒込中学、男子聖学院、府立五中等があり、又、女学校では佐藤女学校、京華女学校、女子聖学院、滝野川高女、跡見女学校、などがありました。蓬萊町にあった女学校の名前は何でしたっけ。

キャリアをいかして母校の教壇に

教養講座の講師として

田中良一（高校24回＝昭和47年卒業）

私は本郷中学教養講座の講師として、昨年七月二四日十時四十分から十二時二十分の二時間、講義しました。講座名は、「半導体の作り方（設計編）」です。講座の内容は、半導体を作る時に製品仕様から設計、そして、实际需要なデバイス（形）パターンの作り方を話しました。理解してくれたか分かりませんが、二十三名皆が、一生懸命に聞いてくれたので、「ホッ」としました。

今、大学内で就活準備講座としてキャリア形成教育が行われています。キャリア形成は中学、高校時代から養われるものであるために、地域の大学と中学高校の連携した取組みも行われています。

昨年度の夏期教養講座は、「エレキテル」、「デジカメで撮った写真を作品にしよう」、「コ

ンピュータを活用した英語講座」、「パソコンを使って英検四級対策してみよう」、「電子工作、ランチを作ろう」、「おやつを作ろう」、「税で分かる、公民と君達の生活」、「ヒトの体を知ろう」がありました。講座の傾向として、科学、英語、生活関係の講座に関心を持つている生徒が多いようでした。また、講座は自由参加なので、ためになり、かつ、興味を持つテーマにしないと生徒が、集まらないものもあつたようです。

※卒業生のキャリアを本郷学園中学生に話しする機会を持ちましょう。講座数に限りがありますので、登録しても直ぐに講師を務められないことをご了承ください。

登録は、同窓会ホームページで受けています。その際、キャリアについてレポート用紙一〜二枚程度 of 原稿をお願いします。

田中良一＝tanaka@jacd.org＝に提出していただいても結構です。株式会社DNPEル・エス・アイ・デザイン勤務（大学を卒業後・大日本印刷入社）

本郷中学校教養講座について

本郷中学校教諭 樋口 雅夫
平成十四年度に一年限りであるが、いわゆる二〇〇二年度問題に対応するため、中学生を対象に土曜教養講座が設けられたのが始まりである。

夏期講習期間中には、低進度者に対する補習のほか、中学生には授業が行われていた。中学生にとって勉強はもちろん大切だが、勉強とは自らするものであるし、時間的にゆとりのある夏休みに、授業の枠をこえた様々な学習活動を経験することにより、色々なもの

に興味を持ち、人生経験を広げるきっかけとなるようにということで、平成十六年度に中学生を対象とした夏期教養講座という形で再開された。講座は本校の現役、OB教員だけでなく、社会の様々な方面で活躍されている保護者の方、卒業生であり、後輩へのメッセージを持った教育実習生などから広く募り、例年、十前後の講座が開講されている。四年目を終えた夏期教養講座だが、中学三年生は高校の内容にはいるので、最初につまずかないようにフォローするための講習が組まれたため、今年度から対象は中学一、二年生となった。(平成十九年十一月十二日)

藤巻氏がホームルームで特別講演

関塚正治(高校20回||昭和43年卒業)

平成十九年十月三十一日、本校卒業生による特別講演が中学一年生全クラス二百四十名を対象に視聴覚教室で行われました。講師は藤巻健三氏(高校8回||昭和31年卒業)。氏

は本校野球部で活躍し、卒業後は駒澤大学、電電関東(現NTT東日本)に進み、昭和四十四年第四十回都市対抗野球大会において、監督として全国制覇を達成しています。さらに同年十二月には、フィリピンで開催された日豪比三ヶ国対抗試合に監督として出場しています。

この日の講演の主題は「六つの心」。中学一年生のホームルームは「心」が年間テーマだからです。「六つの心」とは、明るい心、素直な心、反省の心、積極的な心、感謝の心、謙虚な心です。

藤巻氏が強調したのは感謝の心です。この「六つの心」は電電関東の監督時代に、必勝を



藤巻氏が語る六つの心

祈願した千葉市内の神社(電電関東は千葉市代表)に優勝報告に伺ったとき、宮司さんから監督である藤巻氏

に今後の部員指導など色々な所でお話される際に活用出来れば、と書いて頂いたものなのです。藤巻氏は最後に「感謝の心を忘れず強い男になれ!」と強調され、四十分間の講演を締めくくりました。

講演後、校長室で理事長先生、校長先生、常務理事、教頭先生を交え三十分ほど学校の現状をお伺いして学校を後にしました。今回の講演には、同窓会誌銀友の市倉洋一編集長(高12回||昭和35年卒業)、同期生の新澤米次さん、野球部OB会会長の細谷弘(高14回||昭和37年卒業)さんと同窓会を代表して私、関塚が聴講致しました。

帰り際、藤巻さんが新澤さんに「テシには家に着いたらすぐに連絡しておくよ!心配していたから」と話していました。この講演のために資料集められながらも、都合で出席できなかった同期の勅使河原宏記さんへの心遣いでしよう。このように感謝の心を大切にする藤巻氏の講演は、中学一年生全員の心を掴んだのではないかと思います。

同期の輪



中学19回 (昭和15年卒業)

同期会

(玉川 昭)

昨年九月二十三日、本郷学園文化祭にあわせて、同窓会サロンも設けられた。その一隅に休眠中の我が同期会諸君の顔もあった。「銀友」の記事を参考に三十五名の学友に呼び掛けるの事である。若き日歌った校歌を口ずさみ、あつたはずの青春、花を咲かせたその果実の話等、豊富な肴と共に酒をくみかわすのも、年齢八十余には良薬ではないであらうか。

「同期会を今一度」。記念の写真、同期の諸兄よ、名前と顔とわかるかな。後列 新井

(カメラマン)、山本(巖)、保谷、玉川。前列 板倉、横田、野木、増田。花の好青年と云われた八名である。

高校6回(昭和29年卒業)同期会

(篠 喜三郎)

二年前の平成十七年に古希の祝いをして以来の同期会を、平成十九年五月十六日(水)に、浅草むぎとろで二年振りに開催した。

当日は、五月晴れに近い快晴に恵まれて、二日後に控えた浅草三社祭りの飾り付けに、浮き立った下町の匂いが、この同期会を盛り上げてくれるような気がした。更に、初参加の高橋利彰、霜越、田口健次の諸氏を交えた二十三名が元氣な顔を揃えて、恩師林英夫先生亡き後だが、当所の中島洋吉会長の過分のご好意もあって、賑やかで楽しい一時を過ごさせて頂いた。その上で昭和二十九年卒の我々同期会を、染井二九(福)の会と改めようと云う多数意見に依り、今後この名称でいくこととした。会の幹事には津久田愛之助氏が決まり、次会も皆、元氣で参加出



来る事を祈念して、校歌斉唱と一本締めで散会となった。

高校12回(昭和35年卒業)同期会

(西野保博)
(高好俊一)

昨年十一月のある日、同級生の田部井君から電話があり、十二月一日に三十五年卒業の同窓会があるので出席しないかと誘われ、彼とも久しぶりに会いたいのので出席することにしました。その電話を切ってからクラスの仲間の顔を思い出してみました。如何とも四十七年前のことで、私の脳裏には数人しか浮かんできませんでした。正直、その数人も来るのか来ないのかも分からないと思うと、急に不安が襲ってきて、断りの電話をいれようか、とも思ったのですが、懐かしさのあまり、巣鴨の中華料理店に向かいました。開始時間より早く着いて、幹事の市倉、小田川さんに挨拶はしたものの、当然、高校時代の顔は思い出せません。そして次から次と

白髪、禿頭(小生も禿頭)の同級生が来ても見覚えのある顔はなく、来たことを少々悔やみながらも周囲の話を聞いていました。それでも、開宴して二、三十分ほど経つと酒と料理でくつろいできたせいか、いつの間にか歓談の輪に加わっていました。

会社のOB同士の集まりだと、ついつい孫とか病気の話になりがちですが、ここでは、同じ学び舎で過ごした三年間の青春の話題に花が咲く、一味違った歓談の場でした。そんな雰囲気なかで、卒業して四十七年経っても同じ価値観と安心感が共有でき、久しぶりにウキウキ気分が車窓の人となりました。幹事は大変でしょうが続編を望みます。(西野)

平成十九年十二月一日午後六時より久保君のお計らいで巣鴨の知味飯店で、高十二回生の同期会「本友会」が開催されました。話に聞いたところ、これまではブロック的に集まっていたようですが、今回のように全体的に開催したのは初めてとのことでした。



私も今回、皆様方とほぼ五十年ぶりにお会いして、だれがだれだかさっぱり分からない状態でした。しかし時間が経つにつれ、楽しく遊んだころの思い出に花を咲き、また旧友との再会を、美味しいお酒を味わいながら喜び合い、小田川君からもあれやこれやと話を聞いているうちに、だんだんと学園生活の一口

マーコマを思い出してきました。最後のころにはすっかり高校生時代に戻ってしまいました。

集まった十七名の皆さんの温厚な顔。また品格があり、我が母校本郷の校風に育まれてきたからこそ、と感じ入った次第です。いまだに私の頭の中にその余韻が残っています。今後もこの良き出会いを続けていきたいと思っています。

今回参加できなかった級友たちの再会を期待し、幹事の市倉君、久保君、小田川君のご足労に感謝し、この十月と十一月に亡くなられた星野君、滝瀬君の冥福をお祈りしまして、感想文とさせていただきます。(高好)

写真・左上から右へ

塙 和道、小田川敏孝、熊木宏治、辻 忠直、久保国男、西野保博、高木佑三、竹村義教、高橋 徹、田部井勇、高好俊一、鈴木教司、片山暉雄、市倉洋一、長谷川修、久保田晴夫、飯田典幸君



高校13回(昭和36年卒業)同期会

(斎藤 毅)

昭和三十六年三月に卒業して以来二回目の同窓会である。十六名の参加であった。今回の同窓会開催にあたり、まだ同窓会の発足を知らない方への声かけを行なった。その結果数名がはせ参じてくれた。参集した同窓生は46年ぶりでお互いに名前を確認し合い、当時のアルバムを見ながら昔話に花が咲いた。ただ、残念なのは、今回も訃報の連絡があったことだ。ご冥福を祈りたい。

高校21回(昭和44年卒業)同期会

(中田守喜)

二十一回生の有志を募り五回目となる三浦修先生を囲む「ひょうたん島の会」を、平成十九年十二月十三日に、本駒込のトンカツ屋「わらし子」(二十二回生、高橋和生君経営)にて開催のところ先生を含め十人が集まりました。

会場に入れば、そこは本郷の学び舎となり先生を中心に懐かしい昔話で、クラブ活動の思い出、仲間の消息の情報交換、等々盛り上



がりました。なかでも富岡君は、三浦先生の教えを守り、国税局退官後も大学院に通っているとかで、努力家の彼に大喝采でした。一生勉学に励む事が人の道、と先生が諭された事が今の自分に生きているとは、彼の弁でした。先生を含め全員脱帽。

建築屋、実業家、会計士、すし屋、証券業、エンジニア、アパレルなど多彩な仕事に就いた旧友に元氣と勇氣を見出した中身ある「ひょうたん島の会」でした。十時三十分、今後の仲間集めに努力する事を誓って解散しましたが、四次会を四時まで挙行了した四人の元氣さには改めて驚かされました。

写真後列左より

矢沢秀治、外塚正博、完山 進、小松健介君
三浦修先生、富岡俊明君、私。

中段は

宮沢 操君。

前列左より

中川 誠、染谷 謙君

本郷祭報告

田中良一（高校 24 回 = 昭和 47 年卒業）

同窓会展示 開催日：平成 19 年 9 月 22 日（土）、23 日（日）

場 所：35 号館 2 階教室

同窓会サロン 開催日：平成 19 年 9 月 23 日

場 所：三菱養和会巣鴨スポーツセンター「レストランパルテール」

本郷学園の最大のイベント「本郷祭」(文化祭)。昨年は「どげんかせんといかん」をテーマに開催されました。毎回のテーマは生徒たちが決めています。

わが同窓会も教室を借りて、ささやかな展示をして同窓生の来場を待ちました。新澤米次氏（高校 8 回 = 昭和 31 年卒業）には、日ごろ撮りつづけた写真のうち、ご本人お気に入りの傑作を展示していただきました。

恒例の同窓会サロン(懇親会)は、回を重ねるごとに参加者が増えています。今回も、テーブルを囲んで同期の友が、時間の経つのも忘れて懐かしい思い出話にふけり、同級生の消息に一喜一憂しながらも、歓談の輪が広がっていました。バスケット部の卒業生は事前に連絡を取りあい、10名ほどが参加してくださいました。その中には、山形



市在住で、(財)日本バスケットボール協会の監事を務められ、八幡カップ全国シニア交歓大会や、山形のママさんバスケットボールを立ちあげられた阿部敏一郎氏（中学 13 回 = 昭和 15 年卒業）の元気な姿もみられました。

入場門



同窓会の部屋



同窓会サロン

四国讃岐の旅 寺田正美(高校24回=昭和47年卒業)

旅行日：平成19年10月13、14日

旅人：11名 参加費：6万円

宿屋：香川県、湯元ことひら温泉琴参閣

1日目：羽田空港ANA出発カウンターに午前7時に集合し高松に出発。最初に高松松平家菩提寺の法然寺へ行き、学園の初代、2代理事長の墓参をしてきました。また、学園側から中津川常務理事の参加を頂きました。法然寺では、お茶の接待を受け、お世話になりました。次に栗林公園を、松平公益会の大山十三士事務局長と合流、ボランティアのガイドさんをともなって散策し、公園の茶屋でお昼を取りました。栗林公園を後にして玉藻公園、松平家の歴史資料なども保管する県歴史博物館を見学。ここで大山さんと別れ、宿泊地の湯元ことひら温泉にて疲れを取りました。

2日目：金刀比羅宮参拝、金丸座見学、そして、善通寺参拝から丸亀城見学、お昼に讃岐うどんを楽しみ高松空港へ。



松平頼明前理事長のお墓



法然寺茶室



玉藻城公園



金刀比羅宮石段

平成十九年度定期総会報告

日 時：平成19年6月16日（土）午後3時
会 場：本郷学園会議室 出席者数：31名

市倉 洋一（高校12回Ⅱ昭和35年卒業）

関塚正治副会長（高校20回Ⅱ昭和43年卒業）が司会を務め総会を進行する。

議事に先立ち山内英夫会長（高校3回Ⅱ昭和27年卒業）があいさつに立ち、4月21日（土）の平成19年度第1回理事会において会長に再任されたとの報告があり、これを了承した。

次に、小倉義雄理事（高校18回Ⅱ昭和41年卒業）が、学園教諭の立場から、大学への進捗状況やクラブ活動の状況を同窓会誌「銀友」第36号「学園だより」（26頁）の概要を説明した。続いて物故者に黙祷をささげた。

司会が同窓会規定に基づき、議長を山内会長が務めることを告げる。

これより議事に入る。

1. 人事案の件 議長より高校8回（昭和31年卒業）の南谷修氏に理事を委嘱したいと

の提案があり、全会一致でこれを承認した。

2. 平成19年度事業報告の件 議長より提案され、秋元幹夫副会長（高校7回Ⅱ昭和30年卒業）から「銀友」第36号24頁のとおり説明があり、これを了承した。

3. 平成19年度決算報告の件 議長より提案され、寺田正美副会長（高校24回Ⅱ昭和47年卒業）から「銀友」第36号24頁のとおり説明があり、全会一致でこれを承認した。

4. 平成19年度監査報告の件 議長の指名により、篠喜三郎監事（高校6回Ⅱ昭和29年卒業）が、関塚副会長立ち会いのもと、高田隆義監事（高校15回Ⅱ昭和38年卒業）と共に4月17日（火）、コーハン株式会社事務所に於いて監査した結果、「公正かつ妥当であった」と報告し、これを了承した。

5. 平成20年度事業計画案の件 議長より提案され、秋元幹夫副会長から「銀友」第36号25頁のとおり説明があり、全会一致でこれを承認した。

6. 平成20年度予算案の件 議長より提案され、寺田正美副会長から「銀友」第36号25頁のとおり説明があり、全会一致でこれを承認した。

7. 各担務事業報告ならびに計画案の件 議長の指名により、ホームページ管理担当の田中良一副会長（高校24回Ⅱ昭和47年卒業）、「銀友」担当の市倉洋一副会長（高校12回Ⅱ昭和35年卒業）、活性化担当の関塚正治副会長からそれぞれの現状と課題、今後の方向について説明があり、これを了承した。

以上にて議事を終了する。

平成19年度事業報告

自・平成19年4月1日 至・平成20年3月31日

三月十九日	三月十五日	三月十六日	二月十九日	一月十九日	〔平成二十年〕 十二月十五日	十一月十七日	十一月十七日	十月十四日	十月二十日	九月二十三日	九月十五日	九月八日	七月二十一日	六月十六日	五月下旬	四月二十一日	四月七日	〔平成十九年〕	
中学卒業式（会長・副会長出席）	運営委員会（同窓会資料室）	高校卒業式（会長・副会長出席）	運営委員会（同窓会資料室）	理事会・新年会（本校会議室・養和会）	運営委員会（同窓会資料室）	学園幹部との交流会	運営委員会（同窓会資料室）	八十周年記念懇親旅行会（四国・讃岐）	運営委員会（同窓会資料室）	同窓会サロン開設（養和会）	本郷祭出展	運営委員会 体育祭見学（同窓会資料室）	本郷祭準備委員会（同窓会資料室）	運営委員会（同窓会資料室）	定期総会・懇親会（本校会議室・養和会）	銀友発送	運営委員会（同窓会資料室）	理事会・懇親会（本校会議室・養和会）	高校・中学入学式（会長・副会長出席）

平成19年度決算書

自・平成19年4月1日 至・平成20年3月31日

収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
前年度繰越金	7,154,140	卒業生記念品費	64,800
会費（1,149名）	2,799,000	同窓会サロン費	176,110
入会金（平成19年度288名）	864,000	本郷祭出展費	87,819
受取利息	7,594	印刷費（一般）	32,550
雑収入	51,450	印刷費（銀友14,100部）	1,295,511
		発送費（銀友12,941通）	955,045
		発送手数料（銀友）	112,409
		通信費（HPプロバイダー）	44,100
		通信費（一般）	54,953
		名簿管理保守費保守費	176,747
		事務消耗品費	9,407
		会費郵便振替手数料	109,020
		振込手数料	3,254
		对学校交流会費	40,000
		運営委員会交通費補助	104,000
		新成人の集い	89,165
		予備費	340,000
		次年度繰越金	7,181,294
合計	10,876,184	合計	10,876,184

現預金明細

現金	55,952		
郵便貯金	3,055,992	本郷学園同窓会 会長	山内英夫
振替預金	49,870	本郷学園同窓会 会計	寺田正美
三菱東京UFJ普通預金	4,019,480	本郷学園同窓会 監事	篠喜三郎
合計	7,181,294	本郷学園同窓会 監事	高田隆義

平成20年度事業計画案

自・平成20年4月1日 至・平成21年3月31日

	〈平成二十年〉	
四月七日	四月十九日	四月十九日
四月十九日	五月十日	五月十日
五月十日	五月十七日	五月十七日
五月十七日	五月下旬	五月下旬
六月二十一日	七月十九日	七月十九日
七月十九日	九月六日	九月六日
九月六日	九月十三日	九月十三日
九月十三日	九月二十日	九月二十日
九月二十日	九月二十一日	九月二十一日
十月十八日	十一月十五日	十一月十五日
十一月十五日	十一月下旬	十一月下旬
十一月下旬	十二月二十日	十二月二十日
十二月二十日	〈平成二十一年〉	〈平成二十一年〉
一月十七日	二月二十一日	二月二十一日
二月二十一日	三月十四日	三月十四日
三月十四日	三月十九日	三月十九日
三月十九日	三月二十一日	三月二十一日
三月二十一日		

平成20年度予算案

自・平成20年4月1日 至・平成21年3月31日

収入の部		支出の部	
科目	予算	科目	予算
前年度繰越金	7,181,294	卒業生記念品費	80,000
会費(1,500名)	3,000,000	同窓会サロン費	200,000
入会金(平成20年度321名)	963,000	本郷祭出展費	100,000
受取利息	8,000	印刷費(一般)	30,000
		印刷費(銀友)	1,400,000
		発送費(銀友)	880,000
		発送手数料(銀友)	120,000
		銀友編集取材費	20,000
		通信費(HPプロバイダー)	44,100
		通信費(一般)	60,000
		名簿管理保守費	200,000
		事務消耗品費	5,000
		振込手数料	5,000
		対学校交流費	60,000
		運営委員会交通費補助	150,000
		新成人の集い	300,000
		予備費	100,000
		次年度繰越金	7,398,194
合計	11,152,294	合計	11,152,294

学園だより

■平成20年入試結果

		在籍	4年生大学	短期・留学	専門学校	就職	進路決定者	進路決定率
普通科	進学コース全体	246	127	0	5	0	132	53.7%
	特進コース	42	27	0	0	0	27	64.3%
学校全体	19年度卒業生	288	154	0	5	0	159	55.2%

合格校数は順調な右肩上がりの数字を示している。最後まで勉強を続けた生徒が多くなり国公立後期試験合格者は6名を数えた。国公立医学部合格者が増えている。

防衛大学校	横浜市立大学	首都大学東京	福島県立医科大学	宮崎大学	京都大学	信州大学	新潟大学	横浜国立大学	一橋大学	東京農工大学	東京工業大学	東京学芸大学	東京外国語大学	東京海洋大学	東京医科歯科大学	電気通信大学	千葉大学	筑波大学	東北大学	東京大学	国公立大学
3	2	4	1	1	1	2	2	5	1	5	6	4	1	1	1	4	2	3	3	6	現浪
2	1	4	1	0	0	1	0	3	0	3	4	3	1	1	0	3	2	2	3	4	内現役

工学院大学	東京電気大学	武蔵工業大学	芝浦工業大学	専修大学	駒澤大学	東洋大学	日本大学	国際基督教大学	立教大学	明治大学	法政大学	中央大学	学習院大学	青山学院大学	東京理科大学	上智大学	慶應義塾大学	早稲田大学	私立大学	合計	防衛医科大学校
6	11	3	56	17	11	22	70	2	25	52	27	50	12	13	89	19	37	52	現浪	59	1
5	6	2	44	5	6	14	43	1	17	38	20	40	8	7	68	14	19	30	内現役	39	1

明海大学・歯	日本大学・松戸歯科	岩手医科大学・歯	愛知医科大学	日本大学・医	東邦大学・医	東京慈恵会医科大学	帝京大学・医	日本医科大学	順天堂大学・医	埼玉医科大学	岩手医科大学	立命館大学	同志社大学	東京農業大学	獨協大学	國學院大学	明治学院大学	武蔵大学	東京経済大学	成城大学	成蹊大学
1	1	1	1	1	3	1	3	2	1	1	1	6	1	3	7	5	10	5	1	4	12
0	0	0	1	0	0	1	0	2	1	0	0	2	0	2	5	5	5	4	0	3	6

北里大学・獣医	日本獣医生命科学大学・獣医	麻布大学・獣医	横浜薬科大学	日本薬科大学	帝京平成大学・薬	城西国際大学・薬	昭和薬科大学	帝京大学・薬	武蔵野大学・薬	城西大学・薬	昭和大学・薬	日本大学・薬	明治薬科大学	星薬科大学	東京薬科大学	日本歯科大学
1	1	4	1	3	1	3	1	2	3	2	2	1	6	3	5	1
0	0	1	0	2	0	1	1	0	2	2	1	0	3	2	5	1

■平成十九年度クラブ活動状況

高等学校

ラグビー部

◎東京都高等学校総合体育大会第三位

◎関東高等学校ラグビーフットボール大会

Dブロック優勝

◎全国高等学校ラグビーフットボール大会

東京第二地区優勝

◎全国高等学校ラグビーフットボール大会

一回戦(対北条) 四四―一四勝利

二回戦(対茗洪学園)〇―二六敗戦

柔道部

◎東京都第三支部予選会 第二学年男子団体

敢闘賞

◎個人戦男子六六kg級 敢闘賞 笹川 熙

剣道部

◎東京都高等学校体育連盟主催春季剣道大会

男子個人の部 優勝 永井 亮

◎関東高等学校剣道大会 個人出場永井 亮

◎全国高等学校剣道大会東京都予選 団体第

三位

◎わか杉国体東京都少年男子の部選出永井亮

◎雄飛祭高校生親善剣道大会男子団体第三位

スキー部

◎東京都高等学校総合体育大会男スキー学校

対抗選考会男子 第一位

◎アルペン関東大会出場(沖山諭・中村啓介・

内海潤也・平澤勇輝)

◎クロスカントリー関東大会・全国大会・国

体・高校選抜大会出場(内山和也)

水泳部

◎東京都高等学校総合体育大会男子400メ

m自由形第二位 伊藤慶太

男子400m個人メドレー第三位伊藤慶太

◎第六二回国民体育大会少年B男子400m

個人メドレー第四位

バレーボール部

◎東京都私立中学高等学校協会第十支部大会

優勝

フェンシング部

◎東京都高等学校体育連盟主催新人大会

団体戦第三位

個人フルール優勝 関 雅彦

第三位 黒沢 勇

ボウリング部

◎東京都高等学校対抗競技会

第三位 尾島 佑・恵 将貴

第六位 村上拓矢・小林佑輔

◎全国大会出場

吹奏楽部

◎東京都高等学校吹奏楽コンクール 銅賞

科学部

◎東京都私立中学高等学校協会主催 理科研

究発表会 出場

■平成十九年度退職教職員

◎校長 高橋 雄

◎芸術科 小澤 稔

◎体育科 阿出川信夫

◎英語科 河野 雅昭

◎保健室 小島 幸子

◎事務室 藪 孝

本郷学園同窓会会費納入者一覽

平成二十年三月三十一日現在

中18回60愛 利三・安達 正治・新井 義雄・新井 保文

青戸 將 磯川 清和 磯野 泰夫 岩崎 輿次 昭

五十嵐 宏 今里 功 石田 順嗣 榎本 春雄

岡田 光正 大原 隆 北堀 幸雄 栗山 春雄

金子 佐多美 北村 廣三郎 北堀 幸雄 栗山 春雄

後藤 良一 佐々木 昭 佐藤 明夫 志田 芳久

清水 正美 杉原 繁夫 菅野 英夫 菅野 武司

鈴木 卓三 高橋 昌男 妹尾 尚 高橋 義二

高橋 三郎 高橋 操六 髙桑 益行 鳥飼 正

友安 昭治 西野 重義 中山 守次 中山 義正

仲摩 邦夫 二木 清夫 野本 昭 長谷川 忠也

馬場 隆 服部 星之助 服部 定善 菩提寺 悅男

松廣 翠 松原 裕 松本 純治 前田 和男

山田 昭平 武藤 泰夫 森 正徳 信夫

山田 卓治 山本 昇 渡部 豊一 渡辺 信夫

中19回31阿出川 義男 新井 忠彦 浅原 義久 石井 博夫

板倉 一典 岡田 貢一 太田 健三 大久保 武司

大野 勝弘 貝塚 明雄 菅 文男 柏原 英一

菊田 勇 重永 政夫 鈴木 孝一 鈴木 司郎

外川 一雄 玉川 昭 高橋 實 高橋 昭彌

竹本 三男 永井 四郎 西村 努 野木 達司

長谷川 広司 保谷 六郎 増田 速水 山崎 達司

山本 巖 築 尚 横田 文男

中20回22市川 恒雄 西村 和男 大屋 忠 大塚 康夫

金澤 一朗 久保 政義 倉田 桂二 佐藤 昌雄

島田 正夫 田島 利男 鶴岡 俊雄 中島 敬太郎

羽山 健児 橋本 公成 久永 幸隆 藤林 晃

皆川 敬次 山下 保次 横山 盛 市川 保

菊入 喜三郎 鈴木 三好

中21回21阿知波 健・市橋 光雄・板倉 厚・大下 晃

中2回2岡田 孝一・川辺 武彦

中3回4安藤 正二・青柳 志郎・高市 章・野本三千雄

中4回1亀甲 勲

中5回3石井 千里・高山 三郎・広瀬 武次

中6回3大和 禎人・佐原雄次郎・堀江 勇治

中7回1佐藤 忠夫

中8回4石坂 岩雄・鈴木 貞夫・谷崎 丈夫・竹田 亨

中9回5有賀 活郎・鶴木 諄・大塚秀太郎・佐々木岸太郎

吉原 晴夫

中10回9伊藤 龍昭・大和多利治・大塚 信男・久住 進一

後藤 恒久・小泉 進・鈴木 勝美・永井 吉男

毛利 正利

中11回12市川 雄一・太田 芳蔵・木村 善男・黒川 興文

篠 房蔵・高橋 耕一・塚田 芳雄・中野 武正

水谷 郁夫・山岸 勝美・八杉 繁 吉田 大象

中12回11新井 洗・石原 豊英・河北 展生・上村 和夫

楠本善一郎・後藤 嘉徳・小路 作衛 坂口 甫

吉田 正吾・和気 秀夫・小松 昭

中13回15阿部敏一郎・石原 清助・石川 正達・太田 恭二

中14回11栗野 栄一・尾立 維久・佐藤 三良・柴崎甲子夫

鈴木 一郎・多賀 一郎・西村 博 藤井 繁太

藤井 稔 堀江 伸美 森本 三郎

中15回24阿部 敏秋・新井 文一・奥平 保正 荻原 久雄

太田 年三 大河原由雄 河原 傑 勝 敬二

栗原 重雄 丑合 邦夫 高沢 俊 野村 節男

土屋 健人 中村 美登 根本 卓光 野村 秀二

荻原 友郎 畑 定 松本 八郎 宮本 幸雄

中16回17安芸 八郎 大津 泰三 加瀬 量次 菊地 宏

木村 宮造 木村 康夫 小永井 暹 白井 明

橋 璋守 田中 凡夫 近澤 勝利 中野 博

野尻 利祐 羽根孝太郎 樋代 幸雄 森 恭久

鶴見 俊一

中17回32阿出川 昭治 按田仁三郎 秋田 禮一 乙部 邦壽

小川 清 小倉 高規 大木 雅通 佐藤 元肇

尾前 広 垣 喜一郎 佐々木 行綱 佐藤 昭

斉田 貢一 下村多気夫 清水 英夫 関谷 昭

高野 正美 田中 稔 田中 裕一 千葉 孝男

角折 幸輝 塚本 直人 土屋 二郎 寺口有喜公

深沢 潤 保坂 忠夫 益田 泰彦 松谷 正

水田 裕昭 森 宏 山口 登 鈴木 隆

中18回60愛 利三・安達 正治・新井 義雄・新井 保文

青戸 将 磯川 清和 磯野 泰夫 岩崎 輿次 昭

五十嵐 宏 今里 功 石田 順嗣 榎本 春雄

岡田 光正 大原 隆 北堀 幸雄 栗山 春雄

金子 佐多美 北村 廣三郎 北堀 幸雄 栗山 春雄

後藤 良一 佐々木 昭 佐藤 明夫 志田 芳久

清水 正美 杉原 繁夫 菅野 英夫 菅野 武司

鈴木 卓三 高橋 昌男 妹尾 尚 高橋 義二

高橋 三郎 高橋 操六 髙桑 益行 鳥飼 正

友安 昭治 西野 重義 中山 守次 中山 義正

仲摩 邦夫 二木 清夫 野本 昭 長谷川 忠也

馬場 隆 服部 星之助 服部 定善 菩提寺 悅男

松廣 翠 松原 裕 松本 純治 前田 和男

山田 昭平 武藤 泰夫 森 正徳 信夫

山田 卓治 山本 昇 渡部 豊一 渡辺 信夫

中19回31阿出川 義男 新井 忠彦 浅原 義久 石井 博夫

高6回38	伊藤洋之助・稲垣 泰輔・石井 延彦・池内 春俊 奥村 茂・小椋 一・神崎 俊彰・柏村喜徳郎 栗原廣太郎・蔵田 尚・小林 金則・小林 秀行	高5回8	井沢 清・市村 近・梶野 伸二・片桐幸一郎 島崎 雄司・谷川 洋明・宮坂 貢司・影山 弘	高4回5	岩瀬 禎成・西江 峰夫・渡辺 武男・佐々木直剛 廣瀬 澄	高3回27	石川 達夫・石塚 豊・植松 隆吉・遠藤 巨良 奥平 博一・大槻 一雄・大部 淳夫・北見 尹 志野原三津夫・小浜 卓司・小平 光郎・佐々木三郎 佐々木忠次・齊藤 邦衛・坂崎 実・地曳 秀雄 高橋 正光・中島正次郎・長崎 一・根本 秀強 平子 浅雄・光安 伸夫・望月 敏郎・山口 洋司 山内 英夫・吉田 孝光・渡辺 五郎	高2回13	木村 敏夫・坂野 重一・櫻井 泰・稻田 稔 清水真太郎・豊嶋 敬司・中村 嘉宏・西島 成一 羽生 銚佑・浜野 清隆・宮入 貞雄・廣瀬 六郎 小林 明	高1回4	相川 厚・佐治 栄一・外内 悦雄・堀井幸次郎	中22回7	井筒 千秋・伊藤 文二・坂本 庄司・須田 光夫 高田 政雄・中原 豪彦・野々村長三	大矢 和夫・柄澤 喜市・古門 敏郎・小林 國雄 白井真一郎・田村 義雄・田中 一好・中里 精志 中林 商蔵・二宮 重恒・根本 幹弘・古澤 秀信 藤田 隆・星野 昌弘・横澤 邦彦・小沼 一雄 田中 昭二	高7回10	秋元 幹夫・青木 輝男・井島佳二郎・上岡 延好 島崎 幸人・高橋 三郎・豊嶋 宏・平田 満男 益川 雄治・山内 周	高8回22	海老原 博・大野 俊広・尾島 圭亮・角能 良宣 金子 隆一・木塚 順夫・小室 能広・新沢喜八郎 新澤 米次・勅使河原宏記・中野 修・長澤 秀幸 波多野英夫・深澤 宏之・藤巻 健三・藤本 昭夫 南谷 修・山本 賢一・吉田 光男・渡邊 衛 渡邊 茂明・綿貫 正壽	高9回8	芥川 定義・江原森太郎・田辺 博昭・島村 泰夫 田中 好明・西江 正晴・比企 正憲・吉田 穆	高10回15	青木 弘三・井上栄三郎・岡本 信也・小川 紘 亀井 俊一・紀藤 弘之・小島 友宏・田中 秀明 津原 巖・中河 秀行・林田 有弘・福住 輝男 茂出木義雄・山崎 昇・渡部 長幸	高11回3	赤石 光政・太田 善夫・小池 弘祐	高12回22	市倉 洋一・飯田 典幸・小田川敏孝・大槻 勝英 亀井 忠雄・木村 尤一・久保 国男・熊木 宏治 鈴木 教司・高橋 徹・高好 俊一・瀧瀬 景正 竹村 義教・辻 忠直・中川 幸平・中田 和男	高13回13	阿出川信夫・相川 清・明石 安邦・岩城 正幸 加毛 隆・方波見 茂・越路 往輝・斎藤 毅 篠田 彬・杉本 繁・中村 久・野間口正機 渡辺 則綱	高14回4	伊江 朝睦・芦原 健一・池田 雅彦・篠田 武夫	高15回7	新 安雄・櫻居 義臣・杉山 雅一・高田 隆義 田村 静夫・峯岸 桂介・森坂 展行	高16回1	上島 敏幸	高17回7	池田 明・小野寺良雄・佐藤 仁・園部 一郎 辻内 健志・野田 祐二・四家 文憲	高18回16	秋山 隆利・浅井 俊一・板倉日出男・小倉 義雄 小松 光栄・榊原 康夫・三枝 努・齐田与四郎 重野 光男・新原 義廣・丹波信三郎・田原 克人 根木 輝久・宮沢 正喜・村井 文一・吉見 正憲	高19回4	遠田 守利・沼尻 卓・長谷川 実・吉倉 幸信	高20回12	我妻 光久・大野 英治・後藤 文雄・小林 基展 酒井 孝一・須賀 一夫・関塚 正治・戸張 友晴 西原 薫・野水 国一・堀部 雅美・良川 良真	高21回20	荒井 章登・遠藤 文章・岡野 繁・加藤 健二 菊地 正美・黒杉 寿博・小松 健介・砂田 俊雄 杉山 敏行・杉山 利博・鈴木 英世・鈴木 正規 月居 潤・中田 守喜・中里 勝男・西	高7回10	秋元 幹夫・青木 輝男・井島佳二郎・上岡 延好 島崎 幸人・高橋 三郎・豊嶋 宏・平田 満男 益川 雄治・山内 周	高8回22	海老原 博・大野 俊広・尾島 圭亮・角能 良宣 金子 隆一・木塚 順夫・小室 能広・新沢喜八郎 新澤 米次・勅使河原宏記・中野 修・長澤 秀幸 波多野英夫・深澤 宏之・藤巻 健三・藤本 昭夫 南谷 修・山本 賢一・吉田 光男・渡邊 衛 渡邊 茂明・綿貫 正壽	高9回8	芥川 定义・江原森太郎・田辺 博昭・島村 泰夫 田中 好明・西江 正晴・比企 正憲・吉田 穆	高10回15	青木 弘三・井上栄三郎・岡本 信也・小川 紘 亀井 俊一・紀藤 弘之・小島 友宏・田中 秀明 津原 巖・中河 秀行・林田 有弘・福住 輝男 茂出木義雄・山崎 昇・渡部 長幸	高11回3	赤石 光政・太田 善夫・小池 弘祐	高12回22	市倉 洋一・飯田 典幸・小田川敏孝・大槻 勝英 亀井 忠雄・木村 尤一・久保 国男・熊木 宏治 鈴木 教司・高橋 徹・高好 俊一・瀧瀬 景正 竹村 義教・辻 忠直・中川 幸平・中田 和男	高13回13	阿出川信夫・相川 清・明石 安邦・岩城 正幸 加毛 隆・方波見 茂・越路 往輝・斎藤 毅 篠田 彬・杉本 繁・中村 久・野間口正機 渡辺 則綱	高14回4	伊江 朝睦・芦原 健一・池田 雅彦・篠田 武夫	高15回7	新 安雄・櫻居 義臣・杉山 雅一・高田 隆義 田村 静夫・峯岸 桂介・森坂 展行	高16回1	上島 敏幸	高17回7	池田 明・小野寺良雄・佐藤 仁・園部 一郎 辻内 健志・野田 祐二・四家 文憲	高18回16	秋山 隆利・浅井 俊一・板倉日出男・小倉 義雄 小松 光栄・榊原 康夫・三枝 努・齐田与四郎 重野 光男・新原 義廣・丹波信三郎・田原 克人 根木 輝久・宮沢 正喜・村井 文一・吉見 正憲	高19回4	遠田 守利・沼尻 卓・長谷川 実・吉倉 幸信	高20回12	我妻 光久・大野 英治・後藤 文雄・小林 基展 酒井 孝一・須賀 一夫・関塚 正治・戸張 友晴 西原 薫・野水 国一・堀部 雅美・良川 良真	高21回20	荒井 章登・遠藤 文章・岡野 繁・加藤 健二 菊地 正美・黒杉 寿博・小松 健介・砂田 俊雄 杉山 敏行・杉山 利博・鈴木 英世・鈴木 正規 月居 潤・中田 守喜・中里 勝男・西
-------	--	------	---	------	---------------------------------	-------	--	-------	---	------	------------------------	-------	--	--	-------	---	-------	--	------	---	--------	---	-------	-------------------	--------	--	--------	--	-------	-------------------------	-------	---	-------	-------	-------	--	--------	---	-------	------------------------	--------	--	--------	--	-------	---	-------	--	------	---	--------	---	-------	-------------------	--------	--	--------	--	-------	-------------------------	-------	---	-------	-------	-------	--	--------	---	-------	------------------------	--------	--	--------	--

高29回12	高28回10	高27回9	高26回20	高25回11	高24回12	高23回6	高22回7	早川
横 大久保	小林 松井	河野 星野	金子 杉浦	山口 田島	松島 寺田	仲原 辰男	瀬賀 春雄	盛男・楡山
史郎・飯泉	博貴・菅原	哲史・鈴木	知光・小林	秀行・千野	正美・中村	直樹・太田	達哉・岡村	隆史・松宮
弘明・菅野	義則・田中	利一・高橋	和義・笹沼	邦雄・長谷川	敬司・野田	治・鹿島	光雄・大恵	成直・森田
文彦・渡辺	実・萩原	仲治・畠山	博之・相模	孝治・坂井	定男・峯岸	重光	修三・若杉	成直・森田
嘉伸	宏次	恒明	明男	敏弘	孝次・村上	茂夫・橋	清和	成直・森田
高38回10	高37回14	高36回9	高35回13	高34回5	高33回16	高32回7	高31回12	高30回3
大野 秀樹	横川 健一	山田 晴一	藤本 由紀夫	宮崎 雄一	奥田 十善	山崎 研二	荒谷 繁明	3宮本 茂治
岡村 隆也	高樹 和夫	丸山 芳章	市川 徹	仁・高橋	学・戸谷	小池 治	石坪 英貴	川崎 雅弘
史士・奥村	智敏・矢島	田邊 賢一	尚 茂呂	隆幸・日高	庸克・並木	斎藤 裕貴	裕 席溪	宮部 豊
直和・中尾	俊之	新井 信夫	孝元・山野	裕明・平澤	成中・西	政嗣・臂	文有・中村	豊
高46回6	高45回6	高44回13	高43回12	高42回15	高41回17	高40回4	高39回6	森田 邦治
则松 計征	田代 憲太郎	中村 雅知	上原 弘行	三村 淳悟	小林 和弘	広道 橋	原口 智	邦治・梶
信貴	近藤 正	浦野 恒貴	伊藤 正規	清 金子	千頭 井兎一	拓朗・横山	二 郎	晋介
隆・北澤	茂・中野	立 藤田	吉田 永弘	昇 高山	富沢 信夫	直生・田畑	篠原 史孝	晋介
卓弥・荒井	隆之・下村	啓 浅野	中村 步希	慎 藤田	紙谷 淳一	直人・岡田	隆雄・矢嶋	晋介
昌之	大樹	裕之	義治	吹雪	梅田 昌之	博	実・寺山	晋介
					良一		義泰	

高47回 4 柳瀬 崇博・斉藤 伸之・須原 秀人・佐藤 良

高48回 10 齊藤 隆・尾籠 章次・山中 弘毅・大久保克夫

高49回 12 天池 直人・塩浦 貴之・稻生雄一郎・徳永 理利

鎌田 織雄・増田 健次

林 誠吾・堀 洋平・増田 望・柴崎 大輔

高50回 10 塚脇 敬介・中溝 健晴・近藤 大介・山田 元文

宇野 正敏・清水 貴寛・瀧川 有道・乾 嘉宏

高51回 20 天野 秀忠・西田 勝彦・榎野 貴経・白石 佑一

菅原 大介・佐藤 英明・福田 哲也・新井 亮輔

中田 孝宏・斉藤 国彦・中澤 利幸・橋爪 雄志

堀越 亮・乙丸 貴史・染谷 快典・丹羽 大輔

古島 剛・皆川 裕司・若西 良介・大塚久仁郎

高52回 19 関澤 泰明・高橋 智久・成瀬 隼人・長谷川智洋

塩畑 太一・浜田 栄二・藤本 耕平・鈴木 常太

千田 昌宏・坂本 泰宏・落合 祐之・武内 秀俊

赤松 篤・朝川 仁・猪越 正直・大塚 邦紀

高53回 31 北島 康介・今井 秀星・手塚 悦生・藤田 豊

吉田 朋大・江川 勝久・栗山 孝幸・中井 秀昌

福森 洋輔・山浦 太一・奥山 雄太・齊藤 秀雄

佐谷 健・長南 基・大塚 将哉

小藤 寛之・曾原健一・田中 義人・鶴岡 廣哉

中村 旭・日谷 堯・石田 将敏・宮部 皓太

内原 嘉昭・醍醐 宏治・長島 克弥・深山 敬大

高54回 36 栗野 耕平・石澤 慧・西島 章夫・柳 宗明

高55回 28 香川 景睦・馬嶋健太郎・金子 優太・新村 佳央

仲島 裕皓・長岡 剛史・石崎 真一・加藤 誉幸

山崎 晃一・松本 好史・山下 勇仁・大河内伸剛

伊藤 新・川那辺 翔・佐藤 裕明・深水 雅生

市河 実・小松 晃・小山 悠介・塚田 史朗

佐藤 遼太・秦 武弘・金子 駿太・菊地 悠嗣

朽名 正道・國安 徹・鈴木 博・松本 悠嗣

高56回 27 大棚 貴仁・岩村 淳弘・大森 拓・白坂 健太

高井 俊宏・富塚賢太郎・中山 周平・豊吉 隆太

小林 遼・島田 尚樹・船渡川 哲・松田 将吾

川田 大助・小池 篤史・菅原 一輝・小高 真樹

卯坂元一郎・江利川 堯・福山 慶博・土井 康弘

中田 義元・長谷川裕之・澤山 卓也・布施 健一

山本 崇史・木内 健義・倉島 洋輔

高57回 28 内田 征平・塚本 翔一・溝辺 基・池田 貴生

佐伯 貴士・清水 敦啓・白崎 貴夫・保田 裕明

吉田 峻洋・岡田 亮人・白橋 秀夫・藻利 大地

安藤 裕哉・砂川 大茂・宮本 英明・石原 誠

高58回 48 石上 将大・大黒 政彦・上久保一輝・鈴木 秀太

高橋 裕司・中村 佳博・川村 真生・松島 和人

高橋 俊輔・淡路 正志・木村 悠吾・田中 健一

並木 幹夫・山田 正悟・秋本 悠吾・阿部 健一

石川 秀一・上田 圭介・熊井 洋輔・小池 雅一

田中 義輝・中川 照博・木下 和俊・五味 拓矢

高橋 伊郎・武井 聡・多田 邦生・吉川 直佑

熊谷 圭祐・剣持 祐樹・清水 裕大・萩原 直晶

御子柴 怜志・栗田 正樹・宮沢 祐太・横山 広樹

高橋 広典・加藤 尊・黒田 健斗・関 拓郎

館谷 駿平・土屋 厚人・仲島 孔明・益田 晃太

高59回 64 宇田川翔平・金弘 令・高畑 亮・竹内 宏介

仲川 泰博・鷺澤 仁志・池田哲之輔・大重 保明

日下 陽平・小泉 隼人・古賀 大智・清水 大重

冲中裕太郎・水谷 英人・鈴木 啓章・大野 太郎

福島 寛之・村山 智・池田京太郎・海野 航

木甲斐智明・関根 大介・武井 良祐・橋岡 佑樹

古野 貴年・柳原 孝吉・阿部 佑紀・荒井 崇聡

高木 悠平・横山 佳弘・植田 高啓・辻 健太郎

牧 侑平・田中 暁人・山口 達也・吉田 裕一

篠原 利典・杉山 祐太・山口 達也・吉田 裕一

安部 泰祐・大森 悠也・長田 勝也・鈴木 雄介

高宮 成将・竹村 聡志・新田 剛太・西野 晃司

春山 輝巨・福土 圭一・宮田 優・村川 晃司

大谷 知樹・福土 圭一・宮田 優・村川 晃司

大野 隆一・北澤 基輔・蓮井 大介・吉實 大輔

学園より 教育振興資金へのご寄付のお願い

本郷学園同窓会の皆様には、日頃学園をご支援いただき心から感謝いたします。お蔭様で中学、高校ともに、外部の皆様方から教育内容の充実した学校として年々、より高い評価を戴いております。

今後とも、建学以来の教育理念に則って社会有為の人材を育てるべく、学園あげて取り組む所存でございますので、ご支援の程宜しくお願い申し上げます。

学校の教育内容充実、施設整備などの用途を目的に寄付金を在校生の保護者、卒業生の皆様ほか個人、法人問わず幅広く募集いたしておりますので、ご案内申し上げます。学校法人への寄付金は非課税扱いになっております。趣旨にご賛同いただきましたうえで協力賜われますよう宜しくお願い申し上げます。

(なお、本学園では従来から入学に際し保護者の皆様へのご寄付のお願いは特に致しておりません。)

○お申し込み方法

① 学園事務室に寄付の申込書をご請求ください。

学校法人 本郷学園

〒170-0003 豊島区駒込4-11-1

電話 〇三―三九一七―一四五六

ファックス 〇三―三九一七―〇〇〇七 担当 小幡(事務長)

② 申込書に所定事項をご記入の上、事務室へご提出ください。

③ 指定の銀行振込口座にご入金ください。

④ 入金確認後、「払込金受領書」並びに「特定公益増進法人であることの証明書」(写)を郵送いたします。

○税法上の寄付金控除

私立学校への寄付金は特定公益増進法人に対する寄付金として確定申告により所得税から控除されます。

なお、寄付金控除額は控除対象団体等への年間支払い寄付金の総額(年間総所得の40%以内)から5千円を差し引いた額になります。

計報

謹んでご冥福をお祈り致します

同窓会にご連絡のあった方のみ掲載しております

中2回	面来	正義	中17回	垣喜	一郎
中3回	安藤	正二	関谷	昭	
中4回	浮揚	良一	中18回	松本	純治
	池谷	欽一		水原	奎一
	各務	正		村野	桂三
中5回	大場	栄一	中19回	岩田	義明
中6回	小林	清	高03回	佐藤	正
中7回	田中善次郎			福泉	恒男
中8回	川崎	昌夫	高06回	田中	登
中9回	浅田	光輝		川窪	国明
	鶴木	諄		川合	幸雄
	吉原	晴夫	高08回	新澤喜八郎	
中10回	尾城	正一	高12回	小池	育雄
	鈴木	勝美	高13回	稲垣	篤
中14回	栗野	栄一	高18回	山本	靖夫
	兼平	博	高19回	青野	久視
中15回	中山	甲一	高29回	若梅	文彦
	渡辺	大乗	高31回	嶋崎	昭彦
中16回	長	連朝			敬称略
	和田	節			

編集後記

■「……されどキャッチボール」。「校友を訪ねて」の藤巻氏の野球人生はキャッチボールがきっかけ。天田さんが基本どおり返球する氏の野球センスを見抜いたのでしよう。基本の大切さを思い知らされました。(隆)

■昨年の本郷祭のテーマは「どげんかせんといかん」。生徒たちが決めました。同窓会も「どげんかせんといかん」。万を数える同窓生の皆さま、ご協力のほど、なにとぞよろしく、お願いいたします。(良)

■「母である私の方が本郷時代をなつかしく思い銀友読んでおります」。会費納入の振替用紙通信欄のコメントです。製作の苦勞が癒されます。(正)

■まさに多士済済。原稿を読ませていただいたの実感です。ご自身の来し方とともに本郷での思い出をお寄せください。同期会、クラス会の便りもお待ちしております。少人数の参加者でもかまいません。(洋)

本郷祭に同窓会サロン

(同窓・同期の交流の場)

同期会やクラス会のきっかけ作りにご利用下さい。校友が集う場を同窓会が微力ながら用意します。

(参加費用一、〇〇〇円)
開催予定 9月21日(日)13時より16時まで

場 所 三養養和会巣鴨スポーツセンター
「レストランパルテール」

利用方法 本郷祭会場内の同窓会展示教室で同窓会サロン利用券を受け取り会場にお持ち下さい。同窓会展示教室は未定です。当日の本郷祭案内を参照下さい。

ホームページ掲示板の御利用には左記IDとパスワードを使って下さい。

ID: hongo PW: 1234

南



本年度の本郷祭は
9月20、21日です。
卒業生のご来場を
お待ちしております。

平成20年6月1日発行

本郷学園同窓会

発行責任者 山内 英夫

〒170-0003 東京都豊島区駒込 4-11-1 本郷学園内
同窓会へのお問合せはFAXにてお受けします。

FAX：03-3917-0007